

井上ひさし著「ボローニャ紀行」を読む

今月9日に死去した井上ひさしの著書で、2008年3月に出版され、今年3月に文庫本となった「ボローニャ紀行」を読んだ。そのきっかけは、著者の死去が伝えられたことだ。私は、井上の本は全く読んでいなかったが、新聞紙上で読む彼の意見によって、また、彼がテレビに出て意見を述べているのを見るのがあったので、井上という人物にいくらか親近感を持っていた。亡くなってみると、彼が世の中に大きな影響力を持っていたことがわかった。

私は、2年ほど前、書店に置かれていたこの本に気付き、めくってみたが、余りピンとこなかった。それは、紀行という表題が付いているにも拘わらず、写真が1枚もないことからわかるように、普通の紀行文ではないことにあったと思う。私は、1966年9月から1年間、ミラーノ工科大学に滞在し、ミラーノの東北の郊外に住んだことがあるので、今でもイタリアについて書かれた出版物には関心がある。ボローニャにも2度行ったことがあり、そこが特徴のある赤瓦（明るい茶色）の屋根をもつ建物の町であること、共産党の勢力の強いところで、瓦の色にちなんで赤い都市と呼ばれていること、イタリア随一の美食の地であること（私は1967年4月に観光旅行でボローニャに行ったが、このとき昼食に美味しいラザーニャを食べたことが記憶に残っている）、ボローニャ大学は世界最古の大学と言われていること、などは元から知っていた。

「ボローニャ紀行」には、上記のことも触れられているが、それ以外に、今ではボローニャが世界に冠たる包装機械の生産地であることなど、私が知らなかったことも書かれている。日本のティーバッグ入りのお茶はここで作られた機械を使って製造されているのだそうだ。

この作家が何故ボローニャに関心をもっていたのかを私が知らなかったことも、2年前にこの本がピンと来なかった原因だったのだが、この点については、今回この本を読むことで納得できた。意外なことがあったのだ。詳しく書かれているわけではないが、井上は変わった少年時代を過ごしたようだ。山形県一関市に住んでいたのだが、自宅の近くにあったカトリック教会のカナダ人神父の世話で、仙台にあったラ・サール男子修道会が経営する一種の養護施設に寄宿することになり、高校卒業までそこに居たようだ。その間に、この神父からカトリックの洗礼を受けた。進学した上智大学でも、この神父の世話で、授業料を免除されたうえ、仙台教区から奨学金を得ることができたので、井上はこの神父に大きな恩義を感じていた。この神父は聖ドミニコ会所属だったが、その聖ドミニコ会発祥の地がボローニャなのだ。この神父はボローニャに行くことを願っていたが、その願いは叶わなかった。それで、井上が代わりにボローニャに行き、聖ドメニコ教会に詣でたというわけだ。

こういう井上自身に関する事なども書かれているが、この本の中心テーマは、ボローニャで発達している地域共同社会に根差す種々の活動を紹介して、それとの対比で、現在の日本のあり方を批判することにあるようだ。書き方が軽妙なので、批判はきつい感じのものではない。これがこの作家のスタイルなのだろう。

第2次世界大戦中にイタリア首相だったベニート・ムッソリーニや現イタリア首相のシルヴィオ・ベルルスコーニのことが少し戯画化されて書かれているが、これは、民主政治というものが人気取り政治に陥り易いこと、最近よく使われるようになった言い方では、大衆迎合のポピュリズムがはびこることに、井上に関心をもっていただけではないだろうか。現代活躍している政治家では、フランスのニコラ・サルコジ大統領にも大衆迎合の傾向があり、サルコジは先輩格のベルルスコーニを尊敬している。この2人の仲は良いらしい。ナチス・ドイツを率いたアドルフ・ヒトラーも大衆を扇動する術に長けていた。この本が書かれたのは2007年末よりも前だが、その時点で井上は、今わが国に起きているポピュリズムの傾向を予見して、心配していたのかもしれない。

この本にムッソリーニのことが書かれているのは、彼がボローニャの近くの村で生まれたからだが、ベルルスコーニはそうではなく、ミラーノで生まれ、ミラーノ大学法学部を卒業している。私が、ほんの少しだが、ベルルスコーニと関係があったと言うと、驚く人が多いだろう。余談だが、それについて書いておこう。

ベルルスコーニは早くから商才を発揮して、大財閥を作り上げたのだが、その発端となったのは建設業であった。私はミラーノの旧市街から11 kmほど離れたブルゲーリオというところに住んだのだが、その住まいは、建てられたばかりの10階建ての集合住宅（敢えてマンションとは呼ばないが、実質的には同じようなもの）の7階にあっ

た。当時周りは畑だらけで、そこに似たような大きさの集合住宅が3棟同時に建てられ、その団地的な場所はCentro Residenziale Edilnord（Edilnordは固有名詞で、英語にするとEdilnord Residential Centerになる）と呼ばれていた。これを建てたのが、当時まだ30歳そこそこだったベルルスコーニだったということ、彼が政界の大物になってから私は知った。私がそこに住んでいる間にも、周りに次々と集合住宅が建てられていたのだが、そのひとつにベルルスコーニ自身も入居していたことがあるそうだ。世の中には、いろいろなことがあるものだと思う。（おわり）